

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

なまへのゆらい、というタイトルで作文を書く宿題があった。たしか、十歳か、十一歳のころだ。家に帰って、私は母に自分の名前の由来を訊いた。

あなたが生まれたのは春だったから、春子なのだと、じつにそっけなく母は答え、それまであんまり好きじゃなかった自分の名前が、ますますきらいになった。

地味だし、どことなく年寄りじみている。はるこ、と聞いても読んでも、自分がありふれた子どものような気分になった。ありふれた、退屈な未来が待ち受けているような気がした。春だから春子、というそのシンプルな理由も、ますますもって、退屈さに拍車をかけた。

今みたいに耳新しい名前はほとんどない時代で、クラスメイトにも、地味な名前の子どもは多かった。ヨシエ、ミツコ、ノリコ、ヒサエ。それでも何人か、私には華やかに見える名前の子もいた。エリカ、リリコ、ルナ、ナツミ。あるとき、自分がどんな作文を書いたのだったか、よく思い出せない。覚えているのは、ヒサエという、私と変わらぬ渋い名前の子の作文だった。

比佐江のヒは、したしむ、という意味があります。ヒサエのサは、たすける、という意味があります。ヒサエのエは、長く、おおきな川という意味があります。おとうさんとおかあさんは話し合って、Xと流れる川のように、人を助け、支え、また人に親しまれる人間に育つてもらいたいと、このなまえにきめたそうです。

読み上げられる作文に、度肝を抜かれた。そんなに考え抜かれた名前だったなんて。

驚いたのはヒロユキの作文だった。父と母は新婚旅行でハワイにいった、ハワイの海を見て、いつか子どもが生まれたら海を意味する洋という字をつかおうと決めた。ハワイみたいに美しくて広い海を進んで行けるような子になるようにと願ってつけた、それが洋行というぼくの名です、というのが彼の作文だった。スカートめくりがほとんど趣味になっているいたずら坊主の名前に、そんなロマンチックな意味があったなんてと、さらにショックを受けた。

それにくらべて私はどうだ。春だから春子。なんにも考えていないことがばれれば、頭の悪そうな名前。黒い犬にクロと名づけるのと、たいして変わらないじゃないか。

B

春子なんて名前は捨ててしまおうと、そのとき決心した。そうしてこっそり、ノートの裏に新しい名前を書いてみた。

春葉。春海。春香。春枝。

Y

した。春の海、と

いう文字が気に入って、友達に私は言ったものだった。今日から私は春海になります。お手紙をくれるときは、あてなにちゃんと春の海と書いてねと。

しかし私は春子だった。どうしたって春子だった。春子のまま思春期を迎え、春子のまま大人になった。地味で、シンプルで、退屈な大人になった。

結婚したのは三十一歳のときだ。

(中略)

夫は龍二*りゅうじのようでも大地のようでもなかった。へらへらしているようで、その実しっかりしているようで、でもやっぱり頼りないところもあって、実際、どんな人なのか、交際をはじめてもなかなかわからなかった。夫も私に負けず劣らず平凡へいぼんな名前なまえで、ノリオという。名前の由来を知っているかと、交際をはじめてから訊いたことがある。

夫の父はノリユキで、父の父はノリシゲ、つまり夫の家

は先祖代々、男の子に「典」の字を使うらしかった。私と同じくらいかんたんな命名に、笑ってしまった。この人と結婚するかもしれないと思ったのは、あのときだったような気がする。釣り合いがとれているような気がしたのだ。名前の、というより、名前があらわしているであろう私たちの平凡さの。

都心に出るのに電車で三十分かかる町に、私たちは暮らしている。平日はともに満員電車に乗って会社へいき、双方が家に帰り着くのがだいたい八時、夕食をとって十二時には眠る。週末はたいてい、近所に買いものにいくか、やっぱり近所の公園をぶらつくか、あとは家でなんにもせずに過ごすことが多い。

私たちのあいだに第三者が介入かいにゅうしてくる気配はない。夫が浮気うわきをしている様子はないし、私もまた、夫以外の連れかと親しくなりたいと思うこともない。私たちはただ二人で、日々を暮らしている。

そうしていて気づいたことがある。私は未だ夫がどんな人なのか本当には知らないけれど(そしてたぶん、夫も私とどんな人か本当には知らないに違ちがいないけれど)、私たちは二人とも、面倒くさがりなのだ。ほかに恋人を作っ

たり細工をしたりということは性しょうに合わないのだ。私たち二人の生活を結びつけているものがあるとするなら、それは愛より面倒くささであるに違いない。しかしそれはちつともかなしいことではなくて、どちらかというと安心するようなことだった。龍二との恋愛れんあいも大地との恋愛も、私には、サイズがちいさすぎたり大きすぎたりする靴くつみたいだったから。

大いなる Z、大いなる退屈。

晴れた日曜、洗濯物せんたくものを干しながら、そんな言葉を思いついておかしくなる。

まったく私たちの暮らしは、大いなる Z、大いなる退屈で成り立っている。

名は体をあらわすと言うけれど、ほんとうだ、と感心する。もし私が春海という名前だったら、何かもつと違う日々を送っていたような気がする。名前なんて単なる記号のようなもののなのに、その名前の響きひびが、所有者の人生を導いている気がすることもある。

結婚して一年目に赤ん坊ができた。これまたじつに平凡な時期である。今、五カ月で、私のおなかも少しずつ大きくなってきた。夜、ベッドのなかで眠りを待ちながら、私

と夫は子どもの名前についてあれこれ考えをめぐらせる。

私は子どものころ、自分の平凡な名前がきらいだったから、少しでも華やかさのある名前にしたいと思う。しかし夫は、平凡な自分に、もし闘とう也とか亜あ久亜とか賀が是留ぜりゅうとか希沙羅きさらとかいう名前がついていたら、名前負けしてそれこそ恥はずかしいと言い、太郎とか花子でいいんじゃないかと極論を言う。夫の言うこともわかるが、しかし太郎、花子じゃあんまりではないか。

私たちは毎晩、名前の本をばらめくっては、ああでもない、こうでもない、眠たくなるまで話し合う。喧嘩けんかになることもある。ふたりきりのときは、喧嘩すら面倒でしなかったというのに。

妊婦にんぶが腹にまく帯といっしょに、古めかしい名前辞典が送られてきたのは、妊娠にんしん六カ月目にさしかかるころだった。送り主は母だった。

表紙の黄ばんだ名前辞典は、開くとページがばらばらになるほど古いもので、今の名前辞典とは違い、出ている名前も、良子とか由美子とか、無難なものばかりだ。めくっているうち、あることに気がついた。春、のついている名前に、鉛筆書きのまる印や三角がついている。春枝、春はる

乃、春樹、春夫、春繁、春美。そうして春子と印刷された文字に、強い筆跡^{ひつせき}で、何度も何度もまるがしてある。

私は想像した。若き父と母が、今の私と夫のように、この本をのぞきこみ、ああでもない、こうでもない、まる印や三角をつけあっているところを。春に生まれることだけは決まっていたんだろう。男か女かわからなかったんだろう。本の余白には、字画を数えたのだろう、小学生が書くような書き順が、いくつも書かれている。

春だったから春子なのよと、母はそっけなく言っていたけれど、なんだ、あなただってこんなふうに悩んだんじゃないの。

春子。^C余白に強く残る母の筆跡を、私はそつと指でなぞる。

予定日の三日前、陣痛^{*じんつう}がきた。ちょうど夫は会社に出かけるところだったので、タクシーを呼んでもらった。数分後にやってきたタクシーに、夫に抱きかかえられるようにして乗りこむ。夫もいっしょに乗りこんできて、車内から会社に遅刻^{ちこく}すると電話をしている。

「名前、結局まだ決めてないね」
腹式呼吸をしながら私は夫に言った。

「そんなこと、まだいいって」

「まだって、でもあと二十四時間くらいで決めないと」

「いいから、落ち着きなって」

夫は全身で貧乏揺^{びんぼうゆ}すりをしながらうわずった声で言う。

^D私はちいさく笑ってしまふ。

ルームミラーの下に、運転手の身分証明書が貼^はりだされていた。望月久男と書いてあった。証明写真のなかで、生真面目にこちらを見ている運転手は、たしかに久男という名前が似合っていると、そんなどうでもいいようなことを思った。

タクシーは住宅街を抜け、通勤路である商店街を抜ける。たくさん男や女たちが、せわしなく駅へと歩いていく。駅前^{*}のロータリーにたつ噴水^{ふんすい}が見えてくる。タクシーはロータリーへと直進し、大きく右折した。

そのとき、私は大きく息を呑^のんだ。

「桜」思わず声を出した。

駅前ロータリーから左右に続く道路を覆^{おお}うように、桜の花が満開だった。まるでアーチである。そういえば、この通りは桜の名所だったのだ。一カ月前から産休に入っていたし、買ひものはほとんど夫にいつてもらっていたから、

桜のことなんかすっかり忘れていた。

走っても走っても桜はとぎれなかった。ときおりははらとこぼれ、薄桃色^{うすももいろ}の花びらがタクシーの窓にべたりと貼りついた。桜の花は、満開になるとなぜか動きを止めたように見える。昼間でも発光している特殊^{とくしゅ}な明かりみたいに見える。タイムマシンに乗っている気分だった。子どもを産みにいくのではなく、はるか昔の見知らぬだれかに会いに行くような。

春だ、と今さら気づいたかのように思った。薄桃色の桜が頭上を覆い、その向こうに澄^すんだ青空があり、目線を落とせば、道ばたには黄色い菜の花が風に揺^ゆれていた。家々の庭からは、れんぎようが、パンジーが、名も知らぬ色とりどりの花が、私を見送るように顔をのぞかせている。春だった。視界のすみずみまで、春だった。

すべてがいきいきと発色し、動きだし、弾^{はじ}け、混ざり合い、車窓が映す何もかも、ゴミをあさるカラスも、酒の安売り店の看板も、アスファルトにひかれた白い横断歩道も、二階の窓にひるがえる洗濯物までも、今このとき、ただしい色合いでただしい場所に配置されていると思った。

なんて美しいんだろうと、後部座席で呆^{ほう}けたように私は

思った。この道は今まで何度も通ったことがある、ひとりで、もしくは夫と二人で。それなのに、私は何を見ていたんだろう。まるで目を閉じて歩いてみたいじゃないか。目を開いてみれば、こんなにも美しい世界が飛びこんでくるというのに。

II 春子

春子。そうか、春子。母が私を産むために急いだ道も、こんなふうになるごと春だったんだろう。ああ春だと、おなかをさすりながら母は思ったのだろう。私は世界がこんなにも色鮮^{あざ}やかになるときに、子どもを産むんだと、願わくば、その子どもが目を見開いてこの世界を見てくれるようにと、思ったのだろう。

おなかがぎゅうと痛み、私は夫の腕^{うで}を強く握^{にぎ}る。だいたいようぶかと夫が私をのぞきこむ。へいきへいき、と笑いながら、私はなぜか、別れた二人の恋人のことを思い出す。彼らも彼らの名前にふさわしい日々を送っているだろうか。彼らの名前にふさわしい場所を、目を見開いて見ているだろうか。

「運転手さん、お願い、急いで」泣きそうな声で夫が運転手に話しかけている。

もう少し待ってと、世界に出てこようとしているだれか

に向かつて私は話しかける。もう少し待つて。^Eあなたにふさわしい名前を今考えているから。あなたにしか似合わない名前をまだ考えているから。川みたいな春みたいな、光みたいな太陽みたいな、人を助けるような頼られるような、健康であるような人に好かれるような、いや、そんな意味など何ひとつなくなつていい、あなたがあなたであるとだれかが認識^{にんしき}してくれる名前であるならば。

私と夫と、未だ名前のついていないだれかを乗せたタクシーは、桜のアーチの下をフルスピードで駆け抜ける。

（角田光代「名前」による）

【注】

*龍二のようでも大地のようでも——共に春子の元交際相手。

*陣痛——出産前に起こる腹部の痛み。

*ロータリー——交通整理のための円形地帯。

問一 ―線部A「拍車をかけた」について、ここでの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 勢いを増した

イ 悪影響^{あくえいきやう}を与えた

ウ 重圧^{じゆうあつ}がかかった

エ 限界^{げんがい}がなくなった

問二 空欄^{くうらん}

X

・

Y

にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア うつとり

イ がっくり

ウ さっぱり

エ ゆったり

問三 ―線部B「春子なんて名前は捨ててしまおうと、そのとき決心した」とありますが、それはなぜか。「そのとき」の状況^{じようきやう}もふくめて説明しなさい。

問四 空欄

Z

に共通してあてはまるふさわしいことばを本文中から二字で書き抜きなさい。

問五 ――線部C「余白に強く残る母の筆跡を、私はそつと指でなぞる」とありますが、このときの春子はどのような気持ちか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分も母親になったことの実感がわいてきて、親になる喜びを抱いている。
- イ この辞典を母が使っていたことに気づき、母との思い出を消そうとしている。
- ウ 平凡な名前に強く不満を感じていたので、母に対して申し訳ないと反省している。
- エ 若き母が実は悩んだ末に春子の名前を決定したことを知り、愛しさを覚えている。

問六 ――線部D「私はちいさく笑ってしまう」とありますが、それはなぜか。説明しなさい。

問七 春子は自分の名前について、~~~~~線部I「それまであんまり好きじゃなかった自分の名前が、ますますきらいになった」から~~~~~線部II「春子。そうか、春子」へ捉え方が変化している。捉え方が変化した理由を、七十五字以内で説明しなさい。

問八 ――線部E「あなたにふさわしい名前を今考えているから」とありますが、春子の名づけに対する思いの説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 川や春のように名前にふさわしい場所を連想させる言葉が入っていること。
- イ 平凡でもいいから健康で幸せに生きてくれるような言葉が入っていること。
- ウ 特別な意味がなくても他人からその人だと認められる言葉が入っていること。
- エ 華やかさを持ちながらも名前負けしないちょうどよい言葉が入っていること。